Flyin' to the Sky

京都府立大学 国際センター ニュースレター

Jan. 2018 Vol.11

目次

1. 中国 南京林業大学と国際交流協定を締結しました
2. 豪 マッコーリー大学英語語学センターと国際交流協定を締結しました
3. 中国 雲南農業大学での技術中国語演習に参加して
4. 私が見た「全米一住みたいまち」ポートランド

中国 南京林業大学と国際交流協定を締結しました

生命環境科学研究科 環境科学専攻
教授 古田裕三

写真１．調印式の様子

2017 年 11 月 6 日、中華人民共和国の南京林業大学において学術交流協定の調印式を行いましたので、同大学の概要、締結に至った経緯、調印式の状況等について、ご報告させていただきます。

南京林業大学は、玄武湖を臨む風光明媚な丘陵地帯に位置する地方の主要大学です。

1902 年設立の中央大学と、1910 年設立の金陵大学両校の森林科のみが 1952 年に合併し、南京林学院（南京林業大学の前身）が設立されました。1955 年には、華中農学院林学科（武漢大学、南昌大学、湖北農学院 3 校の森林科からなり）が合併され、1985 年に校名が変更され、現在の南京林業大学となりました。南京林業大学は、林業、材料工学、化学工学、機械電子工学、土木工学、経済経営、人文社会科学、情報科学、造園、外国語、芸術、工業デザイン、光工学、自動車工学、生物学、環境科学、教育学、体育学部等 22 学部を有する総合大学で、現在の中華人民共和国が選抜・指定する数十ある重点大学の一つに入っています。全校生徒数は 30,000 人以上という極めて大きな規模の大学です。国際交流に積極的で、アメリカ、ドイツ、カナダ、イングランド、スウェーデン、ロシア、日本、イタリア、フィンランド、フランス、イラン等の国々を含む 50 以上の大学や研究機関と学術交流を行っており、国際交流プログラムの一環として、ノーサンブリア大学、東京大学、フラロレーヌ大学等と国際共同教育授業を行っています。前身が、林学、特に林産学を中心にスタートした大学であり、この分野では、中華人民共和国の中でもトップを争う大学といっても過言ではありません。

本学と南京林業大学との学術交流は、1980 年代後半に南京林業大学の張勤麗名誉教授が当時京都大学農学部および宇治市黄檗の京都大学木質科学研究所に留学していた際に、本学の梶田熙名誉教授との間で研究に関する交流を行っていたことが契機として始まっています。1995 年 7 月と 1999 年 11 月に梶田名誉教授は、南京林業大学にて招待講義を行っています。また、南京林業大学から本学へ関連研究分野の留学生 2 名が入学し、1991 年および 2000 年にそれぞれ修士課程を修了しております。

最近では、南京林業大学の張敏教授と私の研究室との共同研究として、2005 年度～2009 年度には梱包用木質系材料に関する研究、2012～2015 年度には竹資源の有効利用及び竹炭の高度利用に関する研究、2015 年度には仮設施設用床板兼運送用木質パレットに関する研究を行ってきました。2016 年度は、これまで長きに渡り双方で交流をしてきた実績を踏まえ、今後はさらに密度の高い学術交流を行うために、責任教員を中心に国際交流協定を締結する方針で会議を重ね、学部学科を超えた大きな枠での学術交流を目的として協定を締結することで双方の合意を得ました。

調印式には、本学からは築山学長を筆頭に、研究分野で関連する教員の代表として宮藤教授と私が参加させて頂きました。調印式では、南京林業大学の王学長と本学の築山学長からそれぞれの大学の紹介と締結に至る経緯

などが述べられ、両学長により協定書へのサインが行われました（写真 1)。今回の協定締結を機に、これまでの研究交流に加えて学生の交流にも大きな期待が寄せられました。その後、南京林業大学内に設置されている歴史を展示する資料館、材料科学工程学院などを視察し、その規模や設備の凄さを実感した次第です。例えば、図書館は学内に 3 つあり、そのうちの一つは 7 階建てで 2 館に分かれており、自習スペースも十分に完備しておりました（写真 2)。

今後、双方のメリットを最大限活かすべく、学部学科を超えた大きな枠での学術交流が行われるように努力・期待していきたいと思います。

写真２．図書館の外観と内部

豪 マッコーリー大学英語語学センターと国際交流協定を締結しました

～「世界遺産都市研修I（オーストラリア）」が全学向けの研修に～

文学部　欧米言語文化学科
准教授　出口菜摘

文学部は2017年8月10日にアクセス・マッコーリー（Access Macquarie Limited）を介して、マッコーリー大学の英語語学センター（Macquarie University English Language Centre）と国際交流協定を締結しました。

マッコーリー大学は1964年に創立された公立大学で、オーストラリア連邦シドニーの北東部郊外ノースランドに位置する総合大学です。135ヘクタールの広大なキャンパスには、教養学部、経済学部、人文学部、保健学部、理工学部の5学部が設置されています。とくに言語学分野では、英語教授法、通訳・翻訳などの分野において、オーストラリアでも先導的地位を占めている大学です。

海外からの留学生も多く、留学生教育の初期において重要な役割を担っているのが、大学付属組織である英語語学センターです。同センターは、本学文学部で2016年度から開講された「国際京都学プログラム」のひとつである「世界遺産都市研修Ⅰ」の研修先です。昨年度は文学部11名の学生が現地で文化・語学学習のほか、京都文化を英語で発信するプレゼンテーションをおこなってきました（その際のレポートは、NewsletterのVol.10に）。また、2017年度は2018年2月17日から3月18日に実施予定です。

同センターとの交流は、2015年4月にセンターの担当者が来学したことに始まり、研修内容について議論を重ねてきました。その後、2016年2月には筆者が渡豪し、マッコーリー大学にて担当者と打ち合わせをおこない、現地の様子を視察しました。協定締結に向けては、その協定内容についての意見交換などを継続的に行い、今回の締結成立にいたりました。

今後はマッコーリー大学英語語学センターと本学との間で、学術・文化交流を図るとともに、本学の教育環境の充実と教育水準の一層の向上を目指します。その取組のひとつとして、いよいよ 2018 年度からは「世界遺産都市研修Ⅰ（オーストラリア）」を基にした、全学向け文化・語学研修プログラムが開始されます!

全学にオープン！ 世界遺産都市研修 2018 年度ポスター

中国 雲南農業大学での技術中国語演習に参加して

生命環境学部　農学生命科学科　3 回生　福井友梨

私たち（生徒 3 名・美濃羽先生）は雲南農業大学内にあるゲストハウス（ホテルのよう）で 2017 年 9 月 4 日から 9 月 13 日までの 10 日間を過ごしました（一人部屋×2、二人部屋×1）。昆明は一日の間に、長袖パーカーがほしい肌寒い朝→半袖一枚で十分な日射の厳しい乾燥した昼→突然の豪雨、といったように天気、気候の変わりが激しいことから女性の機嫌のような気候と呼ばれているそうです。大学内では日用品はほとんど全て買い揃えられるほど施設が充実していました。閉店時間は、基本は学生が授業後に立ち寄れるよう 9 時半まで、繁華街のような施設では 12 時を過ぎてまでのスーパーもありました。

中国の学生さんは高校では朝から晩まで学校で勉強漬け、入試の仕組みも日本とは違い、年に一度の全国テストをうけ希望学部を落ちても志望大学に入りたい場合、成績に合わせ大学側が学部を指定する制度があることなどに驚きました。学生さんと話していると例えば勉強に対しての意識の違いが見えてくると同時に就職や結婚観など思わぬところで同じような感覚を持っていることが分かったり、さらに学生から見た現在の中国の話、日本の話が聞けたりととてもいい経験になったと思います。会話はほとんど英語で行いましたが難しい言葉は使わなくとも様々な話をすることができ、仲良くなれました。授業の際は日本語が堪能な先生方が多くおられました。

食事は学内外色々なところへ連れて行っていただきました。食べ方等は周りの学生、先生方を見てまねていました。どの料理もおいしかったです。ただし学外での食事の際など中国語での会話が必須な状況が何度かあり、もっと中国語の勉強が必要だと感じました。また中国のビールは度数が低いですが（かつ常温、冷やす際には氷を入れることもあります）白酒や老酒と呼ばれるお酒はほとんどが 50 度越えで驚きました。中国文化で歓迎の際などは食事中に席を回っておこなう乾杯があるのですが三度まであるそうです。声をかけられたら飲み物をもって立って一言二言話して乾杯しました。

民俗村では雲南の少数民族について深く知ることができました。寺院などは撮影禁止の場所もありましたが文化を学ぶにはとても良い場所でした。西山は標高 2000m を超えていてロープウェイにも乗りました（雨にもかかわらず屋根無し）。その後登山道を歩きました。景色はとても良かったです。道教、仏教のお寺を両方拝観する機会がありました。日本とは異なる点が多く、違いなどを見つけながら巡るのは楽しかったです。文化や考え方の違いなどの勉強にもなりました。石林は地下鉄、高速鉄道（パスポートが必要）、バスを乗り継いで片道 3 時間ほどのところにありました。別世界のように美しい岩の山の間を潜り抜けて回ることができました。食品加工会社や花卉栽培施設を訪れ紹介していただいた際には実際に仕事として携わっている方々とお話しさせていただく貴重な機会を得られました。また実験施設を見て回る機会もありとても充実した訪問となりました。

私が見た「全米一住みたいまち」ポートランド

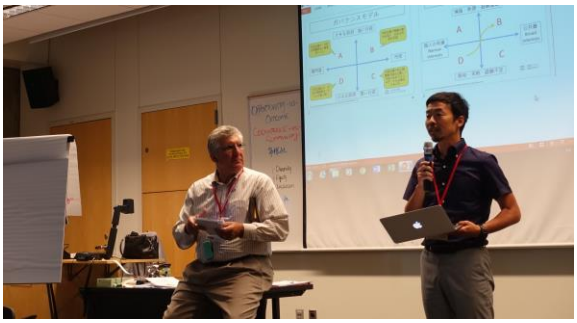
公共政策学部　公共政策学科
准教授　川勝健志

私は 2015 年 4 月～2016 年 3 月までの一年間、サバティカルで「全米一住みたいまち」として、いま日本でも注目を浴びているポートランドに滞在しました。ポートランドがなぜそのように多くの人たちを魅了してやまないのか、そのような魅力的なまちをどのようにしてつくり上げてきたのか、またそうした取り組みが持続可能であるにはどうすればよいのか、といった疑問を私なりに解き明かしたいと思ったからです。

私とポートランドとの出会いは、初めて調査で現地を訪れた 2008 年まで遡ります。その時に感じたのは、欧州のサステイナブル・シティとして有名なドイツのフライブルクやフランスのストラスブールなどと共通する点はあるものの、そうした都市に比べると、明らかに未熟だけれども潜在的な発展のエネルギーのようなものがいつ溢れ出てもおかしくない、そのような何とも不思議な魅力でした。直観的なものに過ぎませんでしたが、もしサバティカルの機会が得られたら、家族も一緒にこの地で暮らしてみたいと、私の脳裏に刻まれた瞬間でもありました。

ポートランドでの私の日課は、子どもを現地のプリスクールに送った後、客員研究員として受け入れて頂いたポートランド州立大学（PSU）のオフィスで研究に没頭するか、都市圏内各所で資料の収集やヒアリング調査を繰り返すというものでした。しかしそんなある日、同じオフィスにいた同僚の先生から「君はいつも誰よりも早くオフィスに来て、帰るのもいつも最後のようだが、せっかくポートランドに来ているのに、なぜもっと外に出て人々と交流し、ここのライフスタイルを楽しまないのだ」と言われました。

ポートランドにはいま週平均で 300～400 人もの人たちが移住してくるという人気ぶりですが、興味深かったのは、その多くが比較的高学歴の若者で、彼／彼女らの最大の動機が“ポートランドのライフスタイル”を求めてやって来るというものだったことです。実際、ポートランドの人たちはじつに上手に生活の豊かさを享受しているように感じます。所得でいえば、ポートランドは全米



PSU 行政職員研修での講義（右：筆者）

平均をやや下回るくらいなのですが、お金がなくてモノやサービスが買えないなら自分達でつくったらいいじゃないか、つくり方を知っている人たちに知識を共有してもらってつくったらいいじゃないか、という感じで、むしろその出来栄えよりもプロセスを楽しむという点に価値を見出しているように思います。日本より規制が緩いこともありますが、ビールまでど素人みたいな人が互いのノウハウを自慢げに語り合って独自のものを作っていると聞いた時には驚かされましたが（笑）。

自らがコミュニティの一員となって現地の人たちと積極的に関わり、日々の生活を楽しむようになって気づいたのは、住みよいまちや地域をつくるには、人びとが集い相互に交流して協力し合う関係を構築できる場づくりの大切さです。実際、そうした公共空間で築いた現地の人たちとの関係は、私の研究はもとより異国で暮らす私たち家族の生活をより実り豊かなものにしてくれたように思います。

PSU 日本人関係者の皆さんと

発行日　2018 年　1 月
発行責任者　国際センター長　川瀬光義
〒606-8522　京都市左京区下鴨半木町 1-5
TEL: 075-703-5905 Email: kokusai@kpu.ac.jp